

目次

はじめに

プロローグ..... 6

高校一年生 春..... 24

高校一年生 夏..... 45

高校一年生 夏 新チーム..... 57

高校一年生 秋..... 74

高校一年生 冬..... 92

高校二年生 春..... 110

高校二年生 夏..... 117

高校二年生 夏 新チーム..... 129

高校二年生 秋..... 148

高校二年生 冬..... 175

選抜甲子園	204
高校三年生 春	242
高校三年生 夏	270
エピソード	298
おわりに	303
昭和高校球児物語 前高完全試合のキセキ 番外編	308
掲載終了後、キリタカ木暮君からの手紙	319
出版に寄せて松本君にお願いし、いただいた面映ゆい一文	322

高校一年生 春

現在の前橋高校は前橋市北東寄りの下沖町に移転しているが、一九七六（昭和五十一）年当時は前橋駅の南側に二〜三キロ行った文京町に位置していた。水田、畑、民家、工場が混在する地域で、市立の天川小、前橋五中といった市内では比較的、児童、生徒数の多い学校群が周辺にあり、県内では珍しくない二子山古墳が近所にあった。

マエタカ数え歌という時代を感じさせる歌謡がある。その二番は「ふたつとせ、二子山からけむ（煙）がでて、今日もエンダ（煙草の隠語と遠くの田んぼ、遠田の掛詞）で日が暮れる、そいつあ剛毅だね、そいつあね〜」とあった。

近所の二子山で隠れて煙草を吸ったことにちなんだものだろう。のどかさ喫煙への憧憬が香り、何とも言えず懐かしくなる。大人への背伸び感覚であり、陰影漂う文化人への憧憬があるのが高校時代であるのは今もそれ程変わってはおるまい。

当時のマエタカは東西に長い長方形の敷地の東側道路の北寄りに正門があり、長方形の長辺に沿って北側から三列校舎が並んでいた。北に最も古い二階建ての木造校舎、真ん中に校長室や職員室、保健室、図書室などのあるコンクリートモルタル塗り建物、南に三階建ての東西に一番長いコンクリートの校舎があった。三列の校舎の西の端に体育館があり、さらにその西側

にプールと各種部活動の部室であるブロック積み二階建ての長屋のような建物があった。校庭はこれらの建物群の南側に広がり、放課後は硬式野球部・軟式野球部・ラグビー部・サッカー部・陸上部で共用して使っていた。硬式野球部は学校敷地東南の端を本塁ベースとし、ライト線は三階建て校舎の一番東の端に向かって伸び、レフト線は校庭の南端ラインに平行に西に向かって伸びていた。

ライトが狭くレフトが広いスペースで、ライト側の校舎の一、二階の窓には打球の危険防止のために金網がかかっていた。

本塁ベースに立って北を臨むと、まず正門横の高さ二〇メートルはあろうかというポプラの大木の先端が風にそよぐ姿がある。

続いてライト方向から順番に左へ目線を移すと、三階建ての校舎、センター後方に屋外トイレ、体育館、プールと続き、左中間にはラグビーのゴールポール、レフト後方は視界が開けて、うつすらとテニス部のコートがのぞまれた。

センターからレフトの方角の更に後方には榛名山、浅間山、さらには妙義山への山並みの連なりがあった。校庭の南側はイチヨウ並木と用水路によって道路と隔てられ、道路の南には水田が広がっていた。

グラウンドは関東ローム層の火山灰で白っぽく、見た目にもやせた土質で硬く乾いていた。風が強いと表面の柔らかい土層は吹き飛んでいってしまい、グラウンド整備時には硬い火山灰層をいつも削り取っている格好で、雑草もあまり生えず、内野から外野にかけて一面の灰白色

であった。

授業中や休み時間の校庭と、放課後練習中のグラウンドは同じものであるはずなのに、不思議とそうは思っていないかった。水はけやうねり、削ると石の出てくるエリアなど感覚に染み付いたグラウンドと、後整備することなく楽しく使う校庭はねじれの位置にあり、今思い出しても「そうか！、同じだったんだ」と驚きの方が先に来る。記憶の中では全くの別の施設なのだった。

入学式が過ぎた数日間、学校内は騒がしい。

「よ！カーキタ何組？」

「シゲちゃん久しぶり〜」

「カツパシャン元気？」

前橋市内で一度転校し、更に中学を受験編入した川北にはその時々で付いたあだ名で声が掛かった。シゲちゃんと言ってくるのは小学校三年まで過ごした総社町地区の前橋六中の出身者。カツパしゃん、キャツシーは小学校六年まで一緒だった東中の出身者。カーキタ、サル、ウマは群大附属中の出身者である。誰もが新しい環境の中で何がどうなっていくのか期待で輝いた顔をしていた。

「ガツシャーんツ！」

大音響と共に教室の扉が叩きあけられた。新入生、一年生の教室が並ぶ木造校舎の建付けの悪いガラス戸が軋み、弾んだ。川北のいる一年五組のクラス全員が息を飲む中、いわゆるガクランに身を包み白いタスキをかけた二人組が教壇に立った。

「チャーツス！」

身を絞るような大絶叫をして、二人組は手を後ろに組んで足を開き上半身を前に折り曲げた。

二、三秒の沈黙。

「お前らぶざけてんじゃねえぞ！人が挨拶してんだよ！」

「チャーツス！」

数人がか細い声で「チャス」とこたえる。

「聞こえねーよ！なめてんのかよ！」

教卓の上の黒板消しが弾け飛んだ。

「もう一度！チャーツス！」

「チャーツス！」

何が無やらわからないが、クラスの全員が応じた。

「よーし。おめーら新入生にな、わざわざ先輩が出向いてきてやったんだよ！今から歌を教えてやつからすぐ覚えろよ！」

「いいか！、返事！」

「チャーツス！」

「よし、まず校歌！」

歌詞も音程も聞き分けられないが圧倒的な声量でガ克蘭上級生は叫び始めた。校歌、応援歌、凱旋歌の計三曲をワンフレーズずつ怒鳴り、新入生に怒鳴らせると、「よし。じゃあ、明日の昼、体育館で仕上げの練習をするから、全員それまでに完全に覚えて来いよ！返事！」

「チャーツス！」

やはり進学校Ⅱひよわの図式は当たっているのだろう。完全にビビらされている。多少なりともプライドを持った人間が集まっているとはいえ、いつの間にか全員がきちんと前を向いて座り、背筋を伸ばし、返事を一生懸命叫んでいる。可愛いものである。

このガ克蘭上級生が応援団であったのがわかったのは、翌日の昼の全体練習であった。

「おめーらがお気楽にのほほんと遊んでる時にな、野球部は毎日練習してんだよ！毎日だぞ！土曜も日曜もねーんだ！だからな、試合には必ず応援に行つて、精一杯応援するんだよ。いいな！」

「チャーツス！」

野球部員として川北はなんとも照れ臭く、面映ゆかった。

県内一の伝統校であり進学校であると自他ともに認める学校であるが、男子校特有のいい加減さと、このようなバンカラの香りも混在していた。それまで共学の環境にいた新入生にとつて、黒一色の教室の雰囲気は寂しいというより慣れない異様さであったが、その違和感も徐々に跡形も無く消えて行つた。